接点を求めて

「キー・パーソンズ」って何？

グループ代表の藤村崇さんに聞く

キー・パーソンズのメンバー
（後列中央が藤村代表）

学生記者・大谷　秀之

最近、「キー・パーソンズ」という学生団体の名前をキャンパスでよく耳にする。インターンシップ方式で、学生と実社会の〝接点〟を広げようというユニークな活動ぶりが新聞にも取り上げられていた。そこで、グループ代表の商学部5年生、藤村崇さんに話を聞いてみた。

自分だけの物差しを持つこと

まず、「キー・パーソンズが学生に求めるものは」と質問したら、藤村さんは「自分だけの物差しを持つことだ」といいきった。さらに「いままでの学生は、就職活動をする際、大企業に入ることを目標にすることが多かったが、これでは社会の物差しに自分を合わせ、自分が本当にやりたいことが見えなくなってしまう。自分の人生を決めるのは、結局は自分なのだから、自分の物差しで物事を見ることが大切だ」と説明が続いた。このひと言で、趣旨がはっきりとわかった。

具体的な活動とは、いままでの会社名の知名度にこだわる企業選びから、企業の実際の姿を自分で判断できる機会を学生に提供している。また、昨年7月には、国会議員のもとへ学生を送り出し、政治というものをじかに体験させるインターンシップ活動もした。この時は13人の若手の国会議員の方に50人の学生を受け入れてもらった。このほか「キー・パーソンズ」は、社会との接点を広げる方法として、大企業のセミナーを開催、役員を招いて学生にナマの声を聞く機会も設けている。

中大生は もっと遊ぶ必要ある

まず心の中の ワクを取り外そう

ことし2月には「超就職セミナー」を開き、沖縄アクターズ・スクールのマキノ正幸校長（あの「安室奈美江」や「SPEED」の育ての親）と、デジタルハリウッド社社長の講演や、三菱商事とモルガンスタンレー社社員のパネルディスカッションなどを開くなど、いずれも好評だった。現在の「キー・パーソンズ」の構成は、活動に賛同した10大学の学生が加わり、メンバーは30人と、さらに活動力を広げている。

ここで、藤村さんが見た中大生の印象や感想を聞いてみたら、いきなり「中大生はもっと遊ぶ必要がある」という言葉が返ってきた。遊びといっても、飲んだり、カラオケをやったりではなく、バイトや勉強、時には危険なことも体験したり、すごいと思えるような人に出会うなど、大きな枠を捉えた意味の「遊び」を経験してほしいという。

「このような遊びを体験することで、視野を広げ、同時に感受性を豊かにしてほしい」と話す藤村さん。本からだけでは決して得られない、体験しないと得られないものを積極的に取り入れる。それを、きっと「遊び」という言葉で表現しているのだろう。

感受性とはなにか。コンピューター関係で中大在学中に起業し、現在の年収が2億円というベンチャー成功例を話してくれた。藤村さんによれば、立場が人を変え、仕事を変えていくが、そのきっかけをつかむのも感受性だという。

ところで、藤村さんの「キー・パーソンズ」の将来展望は――。

「10年、20年と続く団体にしていくことが一つの理想ではあるが、たえず学生の視点で見て、学生に満足してもらえることを目標にしている。そのためには、学生が中心になって運営していかなければならない。そして社会との接点となる場を提供することで、視野を広くしてもらう理念を、いつまでも持ち続けていくことができる」という。

すでに藤村さんの胸の内には4つの活動が組み込まれている。1つ目は、第2回目の国会議員インターンシップを行うこと。2つ目にはパーティー形式で社会人と学生の出会いの場を作ること。3つ目は若い起業家と投資家の交流会を開く。そして4つ目は、沖縄に大学を作ってしまうという壮大な計画である。4つ目に関しては、時間がかかる事業だが目下、その土台作りの最中という。

これらを一見しても「キー・パーソンズ」は一つの枠にとらわれない、さまざまな可能性に挑戦していく姿勢が読み取れる。

藤村さんは「世の中の枠を取り外したい」としきりにいう。枠とは、学生と学生、または学生と社会、企業と企業など、さまざまな形で存在する「枠」のことである。

そこで、私たちはいったい、どうすればよいのか。しかし、答えは決して一つではないはずである。なぜなら、「自分だけの物差しで、答えを出すもの」だからである。私は「社会組織の枠」を取り外すというような大きなことは出来ないが、「自分の心のなかにある枠」なら取り外せることが出来るかもしれない。先ずは、そこからスタートすることを試みたい。